大阪は‘まち’がほんまにおもしろい

大阪あそ歩 OSAKA ASOBO®

司馬遼太郎が愛した大阪の風景
～司馬文学の原点を探して～

大阪で生まれ、大阪で育ち、大阪で死んだ国民的大作家・司馬遼太郎。司馬は大阪のことを「日本におけるもっとも市民的な都市」と言い、自分のことを「街に自己同化してしまっている」とまで言い放ちました。そんな司馬が愛したのが夕陽丘や上町台地で、晩年の随想『大阪の原形』では「夕陽ヶ丘からみる夕陽は美しい。私は学校に通っていたころ、このあたりが好きでよく歩いた。ある日、朱色－あまりにもあざやかな朱であるために天体とはおもえない太陽が、大気のなかを漂うようにして沈んでゆくのを見て、息をわすれるような思いがした。－大阪の名所をあげよといわれれば、この崖ではないか」と記しました。司馬が愛した大阪を逍遥します。

司馬遼太郎 歴史小説家の原点

司馬遼太郎（本名・福田定一）は大正12年（1923）8月7日、大阪市浪速区西神田町（現・塩草）の薬剤師・福田是定と母・直枝の次男（兄は2歳で早世）として誕生しました。難波塩草尋常小学校、上宮中学校、大阪外国語学校に通いましたが、余り学校生活には馴染めず、地元の御蔵跡図書館に日参して本を乱読したといいます。昭和18年（1943）、学徒出陣で満州の戦車部隊へ。本土決戦のために栃木に移り、陸軍少尉として終戦を迎えました。米軍が東京上陸して栃木から戦車で迎撃する作戦が立てられた時に、当時22歳の司馬が「逃げ惑う市民が道路に溢れたらどうしますか?」と参謀に質問すると「轢き殺してゆけ!」と答えられ、司馬は「日本は何故こんな愚かな国になったのだろうか?」と深い疑問を持ち、それが歴史小説家の原点になったと後年、述懐しています。

① 司馬文学の源泉 上町台地

上町台地は大阪城（古代は難波宮、中世は石山本願寺）から高津宮、生玉神社、四天王寺を経て住吉大社辺りまで続く、約12キロに及ぶ大阪市中を南北に連ねる台地です。随筆『大阪城公園駅』では「海鼠形の台地の北の端は、いま私どもが眺めている。ここに西方浄土にあこがれた不思議の経典を誦する堂宇ができたとき、地は生玉荘とよばれ、坂があった。おさかとよばれた。堂宇の地は礫多く、石山とよばれていたが、ここに町屋がならんだとき、この台上にはじめてささやかな賑わいができた。楼上から西をのぞみ、陽傾き、帰帆相次ぐころ、波のかなたの一の谷の崖に沈んでゆく陽日の華やぎは、ひとびとに仏國土を思わせた。堂宇が去り、城ができたとき、日本の歴史は変った。威と美を多層であらわした世界最大の木造構造物は、大航海時代の申し子というべく、その威容を海から見られるべく意識した。事実、この海域に入った南蛮船は、極東のはてに世界意識をもった文明があることを象徴として知った」と記しています。1500年以上もの長きに渡る「歴史都市・大阪」の主要舞台で、まさに司馬文学の源泉となった土地でした。

② 齡延寺

『一杯のコーヒー』によると司馬は大阪外語学校の蒙古語科の同級生と一緒に同寺へ参禅したといいます。「みな少年客気の男どもで、どの男もまだ少年期が続いている、というところがあった。つまり山中峯太郎氏の冒険小説に憧れ、自分もああいう主人公になってみたいと正気で考えている連中であった。・・・生死を超越せにゃならん。友人がいうので、その男に誘われて寺町の禅寺へ参禅に出かけたりした」。ところが2年生ともなると、司馬は心斎橋の映画館やカフェに通い詰めて、「ゴビ砂漠ではコーヒーも飲めない」と少年時代の憧れ・モンゴル草原への思いが薄れるほど「小市民的な悦楽」に耽りました。この安穏な学生生活は学徒出陣によって強制的に終わりを告げます。

③ 銀山寺

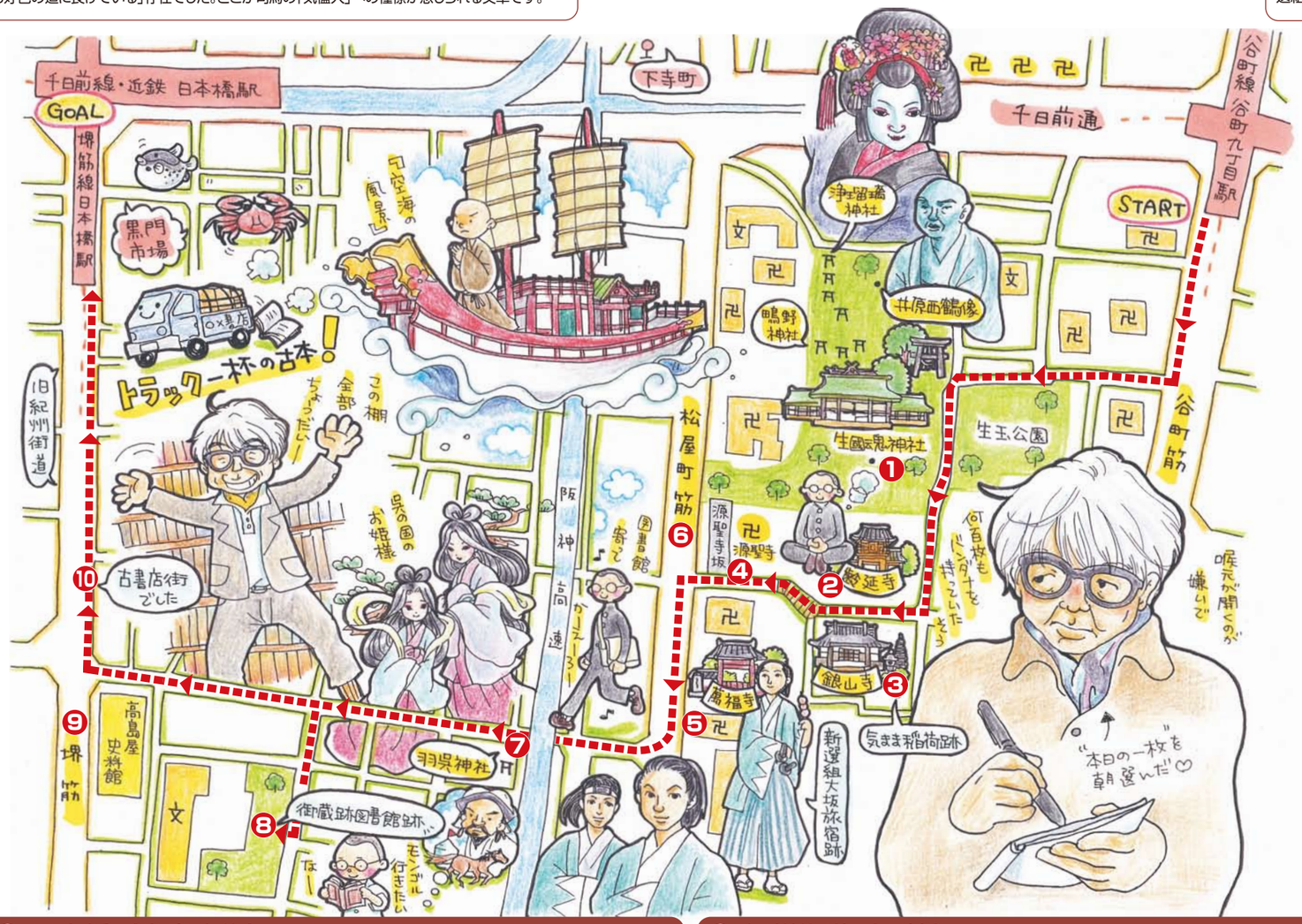
司馬の初期のユーモア短編小説『庄兵衛稲荷』に「庄兵衛をまつるホコラが、だれがいつの時代にたてたのか、いまでも大阪市天王寺区寺町の浄土宗銀山寺の境内にある。気儘稲荷というのだが、いつのほどか安産の利益があるというので、戦前はほそぼそながら参詣人が絶えなかった」と銀山寺が登場します。小説の主人公・庄兵衛は猿霞堂と言い、幕末期に鰻谷に住んだ「気儘人」でした。気儘人とは「町に住んでいる仙人」で、「（大坂は）町全体が、身をすりへらして金を稼ぐことに熱中している土地柄だけに、稼ぎを放棄して、世を茶にして暮らしている人物が、過当なほど大きくみえたのだろう。といって、貧乏ではこの条件にはあたらない。貧乏は、それ自体が緩慢なる破廉恥行為とみるこの土地では、いくら仙人でも金のないのは単なる乞食にすぎない。遊んでいるくせになんとなく金があり、そのうえ人生の機敏に通じ、遊芸一般の心得があり、しかも好色の道に長けている」存在でした。どこか司馬の「気儘人」への憧憬が感じられる文章です。

④ 源聖寺坂

上町台地の崖が坂となっています。『大阪八景』では「奈良の町はずれに似ている。この物さびた風景が、大阪の中央にあるとは、これまた知るひとがすくないだろう。坂の上からのぞむと、つい足もとにミナミの雑踏が見えるのだが、この一角だけはヒグラシの声が聞こえる。松屋町筋から上町台へのぼる下寺町のかたすみにあり、昼も人通りがすくない。江戸時代、船場の商家の若い手代たちが、人目をしのぶ恋をとげるために、この坂をのぼり、生玉の出逢茶屋へしのびやかに入った。とすれば、恋の坂と言えぬことはない」と記されています。じつは司馬の母校・上宮中学や大阪外語学校への通学路でした。

⑤ 萬福寺（新選組 大坂旅宿跡）

文禄3年（1594）、前田利家の弟の前田次郎兵衛利信と僧・開導によって開創。幕末には大坂の不穏な倒幕運動を取り締まるため、新選組が屯営しました。書簡や史料から近藤勇、土方歳三、沖田総司、井上源三郎、谷三十郎、鈴木三樹三郎、山崎烝などが出入りしたと推測されます。司馬は20歳の時に子母澤寛の小説『新選組始末記』を読んで多大な影響を受け、作家となってから『燃えよ剣』『新選組血風録』といった新選組を題材とした小説を書き、人気作家となりました。



⑥ 松屋町筋

古代、海は松屋町筋まで迫り、ここは難波の地（上町台地）に降り立つ白砂青松の海岸で遣隋使・遣唐使船も訪れました。司馬は古代の松屋町筋に思いを馳せ、『大阪城公園駅』には「遠つ國々の舶（ふね）が帆をななめにして松屋町筋の白沙に近づき、この駅舎のあたりの入江のいずれかへ石の碇を沈め、内典・外典の書籍を積みおろしたにちがいない。思想の書、詩の書、工芸の書。…もし若者が、駅舎のベンチの何番目かに腰をおろし、ひざに書物を置いて空を見あげたとき、櫂で描いたような飛行雲があらわれるとすれば、その舶が曳きつづけてきた航跡であるとおもっていいのではないか」と記しています。

⑦ 羽呉神社

かつては天王寺御蔵の鎮守社でした。古代、機織に長けた呉国の渡来人が当地周辺に集住し、ハクレ（ハタオリのクレ）の宮があるのは、その名残です。難波津（古代難波の港）には遣隋使船、遣唐使船が行き交い、司馬の『空海の風景』にも「摂津の難波津を発した丹塗りの遣唐使船が内海を西へ帆走してゆく姿も、おおぜいの里人とともに浜に立って見たであろう」と難波津の光景が登場します。

⑧ 日本橋公園（御蔵跡図書館跡）

大正10年（1921）開館。御蔵跡というのは江戸時代、大坂城の備蓄米の蔵があったことから、そう名づけられました。小さい図書館でしたが司馬は中学1年から出征時まで「図書館にある本の全部といってもいいくらい読んでいた」（『司馬遼太郎が語る日本Ⅲ』）と語るほど通い詰めました。また『司馬遼太郎の世界』には「オランダの農家のような建物があったんです。二階建ての白壁で、屋根の勾配もするどく、いい建物でした」「復員して、まずどこよりも行きたかったのはあの図書館でした」と記していますが、昭和20年（1945）の大阪空襲で焼失してしまいました。

⑩ 日本橋（古書店街）

かつての日本橋は東京・神田と並ぶ古書店街で、若い頃から司馬はよく通い詰めました。とくに明治45年（1912）創業で大阪を代表する老舗古書店・高尾書店（2006年閉店）は、歴史や美術書の品揃えに定評があり、司馬が足しげく通ったことで有名です。高尾書店は戦後、日本橋から梅田の大阪駅前第一ビルに移転しますが、司馬も新聞記者となって産経新聞大阪本社に勤務していたので、昼休みになるとよく同店を訪れました。司馬は、いつも突然「どうもどうも」と店に入り、棚から本を取り出してページを一気に繰り、必要な本は次々に積み上げて購入したといいます。流行作家時代には小説の資料として1000万円分の古書を購入。トラックで司馬宅に運ばせて、古書店主を狂喜乱舞させたといいます。

⑨ 紀州街道（堺筋）

司馬の大ベストセラー紀行文『街道をゆく』に紀州街道が取り上げられています。「大坂城下の主要な南北道路のうち、堺へ向かって南下している堺筋が城下における一等場所で、有力な商舗が道路の両側にひしめき、荷駄がたえまなく往来し、秀吉のころから江戸初期ごろまでは日本におけるもっとも繁華な道路であった・・・その堺筋の南の延長が、紀州街道である」。通学路途中にあり、おそらく司馬が生涯で最も通った歴史街道が、この紀州街道でしょう。

【注意事項】 この地図は「大阪あそ歩」のまち歩きの資料として作成されました。まち歩きには、歩きやすい服装と靴を着用してください。車などによく注意し、各自で責任をもって行動してください。また、住宅地では住民のプライバシーに十分配慮して歩きましょう。

【お問い合わせ】 大阪コミュニティ・ツーリズム推進連絡協議会「大阪あそ歩」事務局　電話06-6282-5930（財団法人大阪観光コンベンション協会内）「大阪あそ歩」の詳しいプログラムはホームページをご覧ください。　http://www.osaka-asobo.jp　または 大阪あそ歩 でネット検索を。

大阪あそ歩のコースは約2～3km、2～3時間程度を基準として作成されています。